

國學院大學學術情報リポジトリ

和歌における「…ばや…連体形」の解釈について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 勝, Oda, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000255

和歌における「…ばや…連体形」の解釈について

小田 勝

本稿の目的

和歌における「…ばや…連体形」（以下、「ばや」の「ば」は已然形接続の接続助詞）の句型は、通常左に示したような形で解釈されることが多い。

- 1 別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて
恋しき（古今集・三七二）
b 別れたら最後、二人の間に距離ができと思うからな

- 2 松もみな竹も別れを思へばや涙のしぐれ降るこちする
（貫之集）
b 松も竹もみな故人との別れを惜しんで泣いているため
なのか、その風に鳴る音を聞くと、涙が時雨となって
降っているような感じがする。（木村正中『土佐日記
貫之集』新潮日本古典集成）

c 松も竹もすべて逝去を悲しく思うからであろうか、涙

が時雨となって降るように風が聞こえる。(田中喜美

春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房)

3 あめの下のがる人もなければや着てし濡れ衣干るよし
もなき(拾遺集・二二一六)

b 天の下、すなわち雨の下を逃れる人がいないからか、

着てしまった濡れ衣を干す手立てもない。(小町谷照

彦『拾遺和歌集』新日本古典文学大系)

4 山陰の伏屋は春も知らねばや軒端の垂氷とくる間もなき

(待賢門院堀河集)

b 山陰の草葺きの小さな家は、春をも知らないのであ

うか、(いつまでも寒さが続いて) 軒端の垂氷は解け

る間もないことだ。(錦織周一『待賢門院堀河集全注釈』

和泉書院)

c 山陰の粗末な家は春とは無縁だからであろうか、軒端

に下がったつららが解ける暇もないことだ。(加藤睦・

松本真奈美『待賢門院堀河集』注釈(一)』立教大

学日本文学』101)

本稿は、この解釈法が不適切であると主張するものである。

一、「…ばや…連体形」は「…ばや」で切れるのか

前節に示したような、「…ばや…連体形」を「…からか、…である(ことよ)」の形で解釈する解釈法は、次のような構文理解に基づいたものである。

①「…ばや…連体形」は「…ばや。…連体形」のように、「ばや」の所で文が切れる。

②「…ばや」で切れるのだから「…ばや」は「…ばや(あらむ)」。などの省略形である。

③「…ばや」で切れるのだから文末の連体形は、「や」の結びではなく、擬喚述法(感動の連体形止め)である。

従って、この理解の正当性は、①「…ばや。」で切れた確かな例が存在すること、②「…ばやあらむ」などの非省略形式が存在すること、によって示されることになる。

実際、「…ばや」と類似する「…ばにや…」には、「…ばにや…終止形」の句型(用例5a)、「…ばにやあらむ」の形式(用例5b)が存在し、「…ばにや。」がそこで切れる形式であることが直ちに示される。

5 a

「夕霧ハ薫ヲ」なま目とまる心も添ひて見ればにや、
まなこゐなど、「柏木ニ比ベテ」これはいますこし強
う才あるさまさりたれど、眼尻^{まじり}のとちめをかしうか
をけるけしきなど「柏木ニ」いとおほえたまへり。

（源氏物語・横笛・④三六四頁）

b

小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ、かばかり
のほどはただいはけなきものとのみ見しを（源氏物語・
横笛・④三五〇頁）

「…にや…」もまた同様である。

6 a

君一人訪はぬからにや我が宿の道も露けくなりぬべら
なり、（貫之集）

b

我妹子が恋ふるにやあらん沖にすむ鴨の浮き寝のやす
けくもなし（古今和歌六帖）

「…なれや…」の形式も、中古以降は「なれや」で切れる例が
存する。

7 a

風吹けば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべ、

らなり、（古今集・六七一）

b

津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり、
（新古今集・六二五）

c

秋の野におく白露は玉なれや貫きかくる蜘蛛の糸すぢ、
（古今集・二二五）

d

別れ路は恋しき人の文なれややらでのみこそ見まくほ
しけれ（拾遺集・三二三）

e

荒磯の岩にくだくる浪なれやつれなき人にかくる心は、
（千載集・六五三）

f

かくて明かし暮らし給ふほどに、二十日^{はつか}の過ぐるは夢
なれや。（平家・二二・六代・②四七〇頁）

それでは「…ばや。」で切れることが確実な例、すなわち「…
ばや…終止形」や「…ばや…体言」等の句型は存在するのだろ
うか。八代集（金葉集は二度本）および新編国歌大観第三卷所
収の平安私家集一二九集で「已然形+ばや」に後続する主文末
の述語の形を調べると、次頁の表のようである。（「同形述語」
とは「終止形・連体形が同形の述語」の意。「体言等」の欄は、
7cのような文末が体言の例、7dのような「…ばや」の後が係り
結び文になっている例、7eのように倒置になっている「…ばや」

	古今集	後撰集	拾遺集	後拾遺集	金葉集	千載集	新古今集	平安私家集
同形述語	五例	三例	四例	二例	一例	五例	一例	七七例
連体形	四例	一例	一例					三三例
終止形								一例
体言等								
その他								二例

で切れることが明らかな例を計上するための欄である。「その他」は注8を参照。

述語が終止形の例として、8の一例が存するが、

8 山かげのふせやははるもしらねばやのきばのたるひとく
るまもなし (待賢門院堀河集・底本は肥前島原松平文庫
本)

唯一例であり、波線部は宮内庁書陵部蔵本(新編私家集大成)の「とくるまもなき」という連体形の本文に従うべきであろう(群書類従本も「とくる間もなき」とする)。そうすると、「…

ばや」には、5a、6aのような、「…ばや…終止形」の例が存在せず、「…ばや。」で切れることが確実な例は存しないということになる。^⑧「ばや」はそこで切れずに述語に係るのであるから、1～4の文末の連体形は係助詞「や」の結びであって、擬喚述法(感動の連体形止め)ではない。従って次例9～11のような終止形・連体形が同形の文末もまた係助詞「や」の結びとして連体形であると考えなければならない。

9 天の河もみちを橋に渡せばやたなばたつ女の秋をしも待
つ (古今集・一七五)

10 久方の月の桂も秋はなほもみちすればや照りまさるらむ
(同・一九四)

11 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざら
ましを (同・五五二)

また、「…ばやあらむ。」などの形式が存するか、「CD-ROM版新編国歌大観」で検索すると、このような形式は一例も存しないことが確認される。^⑨このこともまた、「…ばや…連体形」の句型が、「ばや」で切れないことを示している。

係り結び文「…や…連体形」は文全体で一つの諾否疑問文を

作るから、「…ばや…連体形」の句型は、「…からか、…である（ことよ）」（以下「Ⅰ型」の訳と呼ぶ）ではなく、「…から…なのか？」（以下「Ⅱ型」の訳と呼ぶ）と解釈しなければならぬ¹⁰。

二、「…ばや…の…連体形」の場合

前節に示した「…ばや…」全一三九例の内、四六例は、次のような「…ばや…の…連体形」の句型である。

- 12 夕されば^{ゆふ}蛩よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき
（古今集・五六二）
- 13 みるめなき我が身を浦と知らねばや^か離れなで^{あま}海人の足た
ゆく来る（同・六二三）
- 14 むつまじきいもせのやまと知らねばやはつ秋霧のたちて
へだつる（好忠集）

この句型は単文主格の「の」助詞が表示されていることから、「…の…連体形」という擬喚述法（感動の連体形止め）であって、

- 12 b 恋の炎は目に見えないせいか、あの人はあのように冷淡な^{ことよ}。（新編日本古典文学全集）
- c 光をみないからであろうか、あの人は、冷淡であることよ。（松田武夫『新釈古今和歌集』）

のような訳になると思われるかもしれない。たしかに中古において、単文主格に「の」助詞が表示された場合、終止形で文が終わることはあり得ず、一般に「…の…連体形」という擬喚述法の文となる。しかし、前稿に示した通り、単文主格の「の」助詞は、要するに文末が終止形でさえないければ出現可能なのであって、係り結び文や文末が詠えの終助詞「未然形＋なむ」で終わる文などにも出現するのである。

- 15 a 植ゑて去^いにし秋田かるまで見え来^こねばけさ^{はるか}初雁^{かづ}の音にぞなきぬる（古今集・七七六）
- b 青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける（同・二六）
- 16 a しのぶれど恋しき時はあしひきの山より月のいでこそ来^これ（同・六三三）
- b 秋の露いろいろことにおけばこそ山の木^この葉の千種な

るらめ (同・二五九)

17 a うちしのびいざ住^{すみ}の江の忘草忘れて人のまたや摘まぬ
と (拾遺集・四六六)

b 流れゆく水こほりぬる冬さへやなほ浮草の跡はとどめ

ぬ (後撰集・四八六)

18 垣越^{かきこ}しに散り来る花を見るよりは根込^{ねこ}めに風の吹きも越

さん (同・八五)

前節で確認したように、「ばや…連体形」が「ばや」で切れることがない以上、「や…連体形」という係り結び文が形成されるから、12～14の主格助詞「の」はこの疑問の係り結び文の中に生起していると考えなければならぬ (17のように)。「…や…の…連体形」の句型が、「や…連体形」という疑問の係り結び文の中に主格助詞「の」が表示されたものであり、「の…連体形止め」でないことは、次例の存在からも確認される。

19 よも山に木の芽春雨降りぬればかぞいろはとや花の頼ま
ん (千載集・三一)

なぜなら「や…む」の句型は大量に存するが、推量の助動詞「む」

が擬喚述法の述語に立って「の…む」「コトヨ」となることはあり得ないからである (推量の助動詞でも「の…らむ」の句型だけは (大量に) 存するが、これは擬喚述法とはまた別の句型である)。12～14の連体形は「や」の結びであって、主格助詞「の」に起因するものではないから、これを擬喚述法 (感動の連体形止め) と誤認してはならない。

三、諸注にみる解釈の不統一

以上により、「…ばや…連体形」は、「…からか、…である (ことよ)」「(Ⅰ型) ではなく、文全体を疑問文とした「…から…なのか?」(Ⅱ型)」と解釈しなければならないことが確認された。Ⅰ型とⅡ型とで、結局意味するところは同じではないかという考えがあるとするなら、次例20が異なる表現であることをよく吟味していただきたい。

20 a 金持ちだからだろうか、結婚したことよ。 (Ⅰ型)
b 金持ちだから結婚したのだろうか。 (Ⅱ型)

さらに問題であるのは、「…ばや…連体形」の句型について、

同一の注釈書で、Ⅰ型の解釈とⅡ型の解釈とが恣意的に混在している、ということである。例えば片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社）では、

21 わが宿の花踏みしだく鳥うたむ野はなければやここにしも来る（四四二）

b 野には花がないからここにやって来るのだろうか。（Ⅱ型）

22 別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき（三七二）

b 別れてしまうと、あなたと遠く距離を隔ててしまうと
思うゆえか、一方ではこのようにお会いしていながら、
分かれる前なのに恋しく思われることであるよ。（Ⅰ型）

小町谷照彦『古今和歌集』（ちくま学芸文庫）では、

23 夕されば蛩よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（五六二）

b 私は夕方になると蛩よりもずっと激しく恋の思いに燃

えているのに、光が見えないので、あの人は平然として
いるのか。（Ⅱ型）

24 みるめなき我が身を浦と知らねばや離れなで海人の足た
ゆく来る（六二三）

b 逢う折がない私の身は海松布の生えていない浦のよう
なものだが、それが付かないのだろうか、漁師な
らぬあのお方は、あきらめて遠ざかることもなく、足
がだるくなるほどしきりにやって来る。（Ⅰ型）

のようである。

ここで、古今集の「…ばや…連体形」を諸家がどのように解
釈しているか、一覧にしてみよう。古今集の「…ばや…連体形」
九例を、三つの型に分けて示す。

A 「…ばや…の…連体形」の句型

①夕されば蛩よりけにも燃ゆれども光見ねばや人のつれな
き（五六二）

②みるめなき我が身を浦と知らねばや離れなで海人の足た
ゆく来る（六二三）

③天の河もみちを橋に渡せばやたなばたつ女の秋をしも待

つ (一七五)

B 「…ばや…連体形」の句型

④ わかれてはほどを隔つと思へばやかつ見ながらにかねて
恋しき (三七二)

⑤ わが宿の花ふみしだく鳥うたむ野はなければやここにし
も来る (四四二)

C 「…ばや…らむ」の句型

⑥ 久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ
(一九四)

⑦ 人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだに知られざる
らむ (五二三)

⑧ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざら
ましを (五五二)

⑨ 梅の花咲きての後の身なればやすき物とのみ人の言ふら
む (一〇六六)

結果は下段の表の通りである。⁽¹³⁾ 見られるように、まことに恣意的に訳出していると言わざるを得ない。その中で⑧だけは全注釈書ともⅡ型で訳出しているのが注目される。⁽¹⁴⁾ 全てⅡ型で訳出している注釈書がある(「竹岡」)一方で、この句型をすべてⅠ

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	窪田
Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	松田
Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	集成
Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	講文
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	竹岡
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	?	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	新大
Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	新全
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	片桐
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	角文
Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	筑文

型で訳出している注釈書が存しないことも、Ⅰ型の訳出法の限界を示しているといえるだろう。

なお、疑問条件節中に疑問詞を含む場合は、

25 誰がための錦なればか秋霧の佐保の山辺を立ちかくすら
む (古今集・二六五)

26 来ぬ人待つ夕暮れの秋風はいかに吹けばかわびしかる
らむ (同・七七七)

のように「…ばか…連体形」の句型になる。この句型も、

25 b いったい誰に見せるための錦なのだろうか。誰でも見

られるはずのものなのに、なぜ、秋霧は佐保山のあたりに立ちこめて、紅葉を隠してしまうのだろうか。（新潮日本古典集成）

25 c

誰かのためのもみじの錦であるからか、秋の霧が佐保山を、たちわたって隠しているのだろうか。（新日本古典文学大系）

のようなⅠ型の解釈が横行している一方で、同じ注釈書内で、

26 b 来てくれない人を待っている夕暮れの秋風は、いった

いどんな吹き方をするから、そんなにわびしく思えるのだろうか。（新潮日本古典集成）

のようにⅡ型の解釈がみえるなど、解釈法の不統一がみえる。

26 は26 bのように、25も、現代語には移しにくい句型ではあるが、¹⁶

25 d だれのための錦であるから…（人に見せないように）

立ち隠しているのだろうか。（日本古典文学大系）

のように解釈すべきである。

四、結論

以上、本稿では、次の諸点を指摘した。

Ⅰ 和歌における「…ばや…連体形」の「や」は文末の連体形に係るので、文全体が疑問文となる。

Ⅱ 従って、「…ばや…連体形」を、「や」の所で区切って、「…からか、…である（ことよ）」と訳するのは不適切であり、「…から…なのか？」と解釈しなければならない。

Ⅲ このことは、「…ばや…の…連体形」でも同様であって、この句型における文末の連体形は「や」の結びであり、主格助詞「の」に起因するものではないから、これを擬喚述法（感動の連体形止め）と誤認してはならない。

注

（1）本稿の用例は、散文作品は新編日本古典文学全集に、万葉集は新日本古典文学大系に、万葉集以外の歌集は新編国歌大観による。引用にあたり表記は私に改めた。ただし用例1～4の本文は、それぞれbの注釈書掲示の本文によった。

(2) この解釈法についての疑義は、すでに先学によって指摘されているところである(中村幸弘『和歌構文論考』(新典社・二〇一四年) 第二編第一章)。本稿は、「ばや」連体形^①の全ての用例に対してこの解釈法が不可であることを証明するものである。

(3) 例えば、窪田空穂『古今和歌集評釈』(東京堂・一九六〇年)は、
・天の河もみちを橋に渡せばやたなばたつ女の秋をしも待つ(古今集・一七五)
について、
・天の河は、紅葉を橋として渡すのであろうか。棚機つ女は、その紅葉する秋をひたすらに待っているよ。

と、はっきり「ばや」の所で文を終止させて訳している。

(4) 佐伯梅友『古文読解のための文法』(三省堂・一九八八年)は、すべての「已然形+や」は「や」で切れると主張しているが、中村幸弘注2文獻は、中古以降に「や」で切れる例が存することを上代の用例にまで拡大適用することを疑問視している。中村氏によれば、7のように「や」で明白に切れる例は古今集に至って出現したのであり、上代の「なれや」は全例(五例)が文末が連体形で、係り結びの関係が認められる。このことから中村氏は、「可能なかぎり、本来のはたらきを認めて読み解いてみ」(二二二頁)たいと述べる。例えば、
①もしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる(万葉集・一八八三)

は佐伯梅友説では①aのように、中村幸弘説では①bのように訳出されることになる。

①a (もしきの) 大宮人は暇があるからだろうか(又は「暇があるのだなあ」)。梅の花を髪に挿してここに集まっていることよ。

①b (もしきの) 大宮人は暇があるから、梅の花を髪に挿してここに集まっているのだろうか。

なおこれについて、新日本古典文学大系は、脚注で「暇あれや」は「暇あればや」の意。下の「集へる」と係り結び^②と説明しながら、「(もしきの) 大宮人は暇があるからであろうか、梅を髪に挿してここに集まっている」との解釈を示しているが、これでは注の説明と解釈とが合致していないと評される。いずれにせよ、時代が下ると、「已然形+や」は完全に文末用法として用いられるようになる。①は新古今集では②のような形になっている(「梅」も「桜」になっている)。

②もしきの大宮人はいとまあれや桜をかざして今日も暮らしつ(新古今集・一〇四)

(5) 「一人丸」→「四長秋詠藻」の二九集。CD-ROM版新編国歌大観による。八代集所収歌も除外せず(重複して)数えている。

(6) なお、「未然形+ばや」連体形^③が、「未然ばだろうか、(ことと)よ」のような訳にならないことは自明であろう。

・たとふらんはな心にはことの葉の秋にならばや色かはるべき(秋ニナツタラ、色ガ変ワルダロウカ)(散木奇歌集)

(7) 詞花集は用例がない。なお、次の一例は解しがたい。
・きむをかりて、ひとに
としをへておとにききつるきむのねをてにならしつる秋ぞかなしきかへし

おとにのみききけることとおとればやならしむるか秋のそふらん(中務集)

本船重昭『中務集相如集注釈』(大学堂書店)は歌仙家集本により波線部「かなしき」を「うれしき」に、二重傍線部「か」を「に」に訂し、

は「そふらん」に係るものとして処理した。

(8) 例外的な句型は、表で「平安私家集」の「その他」に示した二例で、次のような短連歌のものである。

・ 小一条どのの人々、なぞなぞがたりに
かたずまけずのはなのうへのつゆ
といひけるに

すまひぐさあはする人のなればや（定方集）

・ 身になげくこと侍るころ

身のうれへ利那がほどもやすめばや

つく

須臾もこのろのなぐさむばかり（散木奇歌集）

短連歌の句末に位置するからといって、そこで切れるとは限らない。

例えば次例の短連歌では反実仮想の「…せば」と言いかけ、付け句の方ではそれに「…まし」と応じている。

・ 進、つきいとあかずなるほどに、しのぶる中将
となかなかによひの月のなかりせば

とあれば、うちに

そらに心のうかばましやは（大斎院前の御集）

ただし右例では付け句の末尾が「つゆ」「ばかり」という名詞（または名詞相当句）となっていることが問題である。これは連歌による特殊

な例とみたい。なお、新編国歌大観第三巻所収の「君みるとそらにしらばやくもりなく万代をのみてらすつきかげ」（伊勢大輔集・東海大

学図書館蔵伝良経筆本）が、異本（新編国歌大観第七巻所収）では、
・ 君みると空にすればやくもりなくよろづよをのみてらす月かげ（彰

考館本）

となっており、この本文では「…ばや…名詞」という句型になっているが、この句型も久保本哲夫『伊勢大輔集注釈』（貴重本刊行会）が正しく

・ あなたがご覧になっているとそれとなく知っているので、それで曇りなく、ひたすら多くの年月を照らす、月の光なのでしょう。

と訳しているように、文末の名詞に述語が補われるのであり、「ばや」で文が切れるわけではない。

（9）

未然形接続の「ば」に、「未然形+ばや+あらむ」の文字列が次の一例だけ得られるが、これは「言はばや（＝言ウナラバ）」が条件句、「あらむ（＝生キテイヨウカ）」が主文の疑問文であって、「…ばやあらむ」（＝ナラバダロウカ）という形式ではない。

・ あはれとは言はばやあらむ誰がための涙ともなく濡るる袖かな（沙弥連偷集・忍恋）

（10）

例えば、山崎桂子『土御門院御百首 土御門院女房日記 新注』で、
・ ゆふ暮はむぐらの宿のしら露も思ひあればや袖におくらむ

に施注して「や」は疑問の係助詞。「らむ」は現在推量の助動詞連体形で係り結び」としながら、「律の宿に置く白露も、恋人を待つせつ

ない思いがあるからか、夕暮れ時は袖に置いていることだろう。」と訳しているのは、係り結びという理解と解釈とが合致していない。

（11）

拙稿『三代集における主節中の主格の「の」について』『岐阜聖徳学園大学紀要』教育学部編 53、二〇一四年。

（12）

窪田『窪田空穂「古今和歌集評釈」（東京堂・一九六〇年）、松田『松田武夫「新釈古今和歌集」（風間書房・一九六八～七五年）、集成』奥村恆哉『古今和歌集』（新潮日本古典集成・一九七八年）、講文『久曾

神昇『古今和歌集全訳』（講談社学術文庫・一九七九～八三年）、竹岡『竹岡正夫「古今和歌集全評釈」（石文書院・一九八一年補訂版）、

新大『小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店・一九八九年、新全』小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』（新

編日本古典文学全集、小学館・一九九四年）、片桐『片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社・一九九八年）、角文』高田祐彦『新版古今和

歌集』（角川ソフィア文庫・二〇〇九年）、筑文』小町谷照彦『古今和歌集』（ちくま学芸文庫・二〇一〇年）。

(13) 表中の「？」〔「新大」の④〕は、

・別れてからは距離を隔てると思いますので、一方ではこのように逢っていないが、もう恋しいのですよ。

(14) ⑧と同様に、

・をしめばや花の散るらむあやにくにもも言はでぞ見るべかりける

(躬恒集)

などもI型で訳すのは困難であろう。

(15)

「：ばや：連体形」をすべてII型で訳す注釈書として、ほかに神作光一・長谷川哲夫『新勅撰和歌集全釈一〜七』（風間書房・一九九四・二〇〇七年）や木船重昭氏の一連の注釈書がある。なお、中村幸弘注2文献によれば、I型の「訳出法は、昭和四十年代五十年代と、一氣に広まったようである」という（二二八頁）。「なれや」についての佐伯梅友説（注4参照）の影響ということであろうか。

(16)

これが訳しにくいのは、現代語では条件節内に疑問詞を収めにくいからである。現代語では、

・誰が来るから、掃除をしたの？

・誰のためだから、掃除をしたの？

という文は作りにくい。このことは古代語と現代語とで節の独立度が異なることを示唆するが、この訳しにくさと「：ばか：連体形」の理解とはまた別の問題である。